

クローバー史

（本稿は、昭和39年当時クローバー部室に保管されていた機関紙等をもとに、Sがまとめ、同年3月1日発行の「かわらばん一別冊」に「クローバー史」として掲載したものを、ほぼ原文のまま復刻したものである。）

クローバー合唱会の歴史は昭和29年にまで遡る。「去年(29年)の9月頃、どうも学校が退屈でしょうがなくなってきたので、中国科の一年生を中心に十人ばかり集まって歌を歌いました。これが会の始まりのようです。」(昭30.11.2 うたごえニュース第2号)。この頃、時を同じくして栄大にも自然発生的なうたう会が生まれていた。この二つの会は30年に入ってから、合同ハイキングや歌集発行、アコーディオンの共同購入を通じて合同の気運をみせ、同年夏までには従来の無原則的な集会から会員制のサークルへと確立し、両校の代表からなる委員会を結成した。そして会の名を「クローバー」と定め、ここに今日のクローバー合唱会の原型が誕生したわけである。

外語大音楽部(現グリー)の歴史はクローバーのそれよりも数年遡って始まっており、既にクローバーに先だって栄大との合同を完了していたと推測されるが、この音楽部が既に組織的に活動していたという事実は、クローバーをそれとは対照的な存在として、かなり異なった発展の仕方(うたごえ運動の一環としての発展)をした

大きな原因になっていると考えることができよう。当時のクローバーは合唱の他にフォークダンスを非常に重視しており、その比重はほぼ等しかったとさえ思われる。そしてこの傾向は少なくとも33年頃まで一貫しており、その後フォークダンスは次第にその比重を減じてきたとは言え、36年頃までは重要な活動の一環を占めていた。

このようにクローバーは「楽しさ」を売りものにした自然発生的なサークルではあったが、その発生と発展のし方は日本の戦後の急激な民主化の中で、まさに雨後のたけのこの如く発生したサークルの一つとして位置付けることを可能にしている。日本は封建国家から後進資本主義国へと急激な転換を明治維新においてなしとげ、国内の経済的状況(過剰人口、資本の欠乏、産業構造の後進性等)と、世界の情勢(西欧先進資本主義国は既に帝国主義の段階にあり、海外市場獲得を目指して激しい抗争を繰り返しており、日本はその脅威にさらされていた)と規定され、不可避免的に軍国主義への道をたどっていたのであるが、その暗雲が第二次世界大戦の終結によって一気に取り払われ、かつて経験したことのない自由と民主主義が洪水のようになだれ込んだ。第二次大戦の惨禍をいやと言うほど味わわされた日本人にとっては、「戦争と平和」という問題は今日考えられないほど深刻であり、日常的であった。また、軍国主義、天皇制絶対主義の下で徹底的に抹殺され続けてきた人間性の開放が何よりも強く意識された時代でもあった。こうしたエネルギーは、戦後再開された圧迫の下で労働運動を飛躍的に発展させ、平和運動、文化運動を広く展開させてきたわけである。人間性の開放と「仲間」

作りを通じての連帯感、団結の達成こそが文化運動の至上目的となりえたのは、その社会的情勢から容易に理解されうるであろう。いわゆる「うたごえ」においてもそれは妥当する。

「うたごえは戦後の混乱した社会を背景にして、誰でもうたえる健康的な歌を求めることから生まれた。誰にでもうたえる健全な歌とは何か。日本には退廃的な流行歌と明治以来の文部省唱歌ぐらいしかなかったから、それに満足できない人が沢山いただろう。それらの人々は手始めに各国の民謡やポピュラーな歌曲などを歌ったろう。だが、日本人の感情に最もぴったりした歌とは、日本人の作った、現代に生きる日本人の生活感情をうたいあげた歌であるのは当然である。それから続々と日本人の手になる創作曲が生まれ始めた。…そこ（日本のうたごえ）で発表された歌の殆どが労働者の日々の生活感情を歌ったものだった。それらが切実な生活の体験を通して生まれ、歌われたものだということは否定できない。ところで切実な生活体験は現実から逃避しては生まれてこない。現実を直視してみよう。そこには安定したように見えるが、実は混沌とした日本の社会がある。我々は皆その中で生活しているのである。当然その規制を受けずにはいられない。その中から生まれてくる歌にもまたその状態を映しているのはあたりまえである。…従ってもし我々がクラシックや民謡だけに満足できずに、現代の歌もとりあげてゆこうとするならば、現代の社会をはっきりとみつめてかかる必要があると思う。」（かわらばん第31号 昭34.12.15「クローバーとうたごえ」 〇氏寄稿より）

このような考え方は、クローバーの誕生とほとんど同時に、世界平和友好祭や日本のうたごえへの参加の中から生まれている。と同時に、ただ集まってわいわいさわぐ楽しさから音楽的な楽しさへと志向する動きも活発であり、いくつかのステージを通じて技術的な高揚が非常に急速に達成されていったことも事実である。しかしながら、どちらかと言えば、技術的向上を目指しての練習の強化に対する抵抗が強く、その思想を反映して、会員制度の廃止を提案するなど極端な動きに走った分子もあった。「僕達のサークルでの技術のあり方はサークルのあり方と切り離しては考えられない。つまり、いわゆるおコーラスできれいに歌うことより、若い学生同志、歌う楽しみを通して生活の一つのよりどころを求めるのが目的である時、何よりも皆が楽しく歌えるような体制が望ましい（うたごえニュース第3号 昭30.12.13より）。従って、多様な内部サークルが発生し、会員の様々な要求を満たす必要が生じたわけである。音楽が楽しみ的手段と考えるならば、「歌ったり踊ったりすることが能じゃない。歴史や文学を学ぶ会を開こう」と言う考えが導き出され、むしろサークルに期待された社会意識の高揚はこの面に大きな比重を置かざるを得なくなるのは当然である。

クローバー組織図（昭和 32 年）

委員長（外 1）
副委員長（栄 1）
マネジャー（各 1）
連絡宣伝（各 1）
渉外（各 1）
財政（各 1）
ニュース（各 2）
印刷（各 2）

内部サークル
フォークダンス研
技術部
歴史研究会
文学読書会

例会は原則として会員制をとるが、随時参加が許可される。

クローバーの成立以来、自他共に認めてきた特徴は「みずみずしい若さと明るさ」であった。それが 32 年の関音祭後、その「楽しさ」の内部を吟味してみようという動きが起こった。即ち、ここでクローバーの活動を単なるリクリエーションと解し、それに特定の意味や性格を与えることに反対する分子（「クローバーに入っている人の多くは勉強やアルバイトで、ともすれば潤いや喜びを失いがちな生活の中に憩いを求めてきているのであり、人生の探求のためにクローバーに入ってきたのではない……。一部の人間の中にはクローバーというものを何か特定の性格あるいは目的を持ったものにしてゆこうとする様子がみえるが、これは全く他愛の無いこと、否むしろ危険なことである。私達は今あるがままのクローバーの明るい雰囲気をも満足しているのだからそれでよいのだ。さあ今までどおり楽しく歌って踊り生活の中に歌と踊りをとけこまし豊かな毎

日をおくろう」（かわらばん第 10 号 昭 32. 12. 18 から）がいる一方で、そのようなリクリエーションとしての価値を認めながらも、更にその楽しみを創造的な愉しみにまで発展させることを考える分子との対立が始まったのである。

「クローバーには青春の喜びを求める若者達は何十人も集まっている。それだけでも楽しさを作る一つの条件である。みずみずしい素朴な魂を持った若い男女が民主的な場の中で、お互いに尊敬しあいながら両者の特徴を生かして緊密に結びつくこと、その過程で各人の人間性を確立して行くこと、それらによってもたらされる楽しさは実に尊いものであり、過去の日本の社会には恵まれなかったものである。更にそのような男女の集まりのみでなく、クローバーは歌と踊りによって楽しさの条件を作り出している。歌ったり踊ったりすることは過去の日本人の生活環境の中にはあまりなじみのないことであった。…。クローバーの中にはおおざっぱに言って楽しさをかたちづくる二つの主要な要素 (relax と recreation) がある。今までのクローバーの楽しさはこの二つの要因によって自然発生的に生まれたものであって、今後それから更に豊かな充実した楽しさに脱皮すべき時が来たように思う。…。我々の日常生活の中で蓄えられた諸々の圧迫や緊張を relax し、更にそれを基にして我々の生命力を recreate する。そこでその作用は絶えず生活に対するまじめさ、或いはより良く生きることによって支えられてゆくこと、具体的には一つの方向として、歌を教わる、踊りを習うという段階から抜け出して、自らの感情、生命力を歌や踊りの中に融けこまして、その中に一つの美しいものを創造することである。…。

それは芸術の創造と呼ぶことだできるだろう。」(かわらばん第 10 号 I 氏寄稿より)

クローバーの活動を芸術の創造として理解しようとする意識が生まれたことは特記しておく必要があるが、「うたごえ運動」を支配していた一つの考え方—生活感情の表現を—がこれに強く影響を与えて、「クローバーの合唱はまだまだ上手になる。しかし仮に会員全部が譜を読め、正しい発声ができるといってもそれだけではだめだ。… 会員の全てが自分の考え方を率直に発表する、お互いにとことんまで意見を述べあう、そういう雰囲気私達の周囲にかもしだされてこそクローバーの合唱は聞く人の心を動かすものになるに違いない。… (かわらばん第 12 号 昭 32. 9. 21) というような考え方を生んだ。それと「クローバー合唱会はいわゆる音楽部的な歌の上達を目標にして入ってきたのではない。俺達は音楽家にはなりたくない」(引用同上) が混然一体をなしてクローバーの性格を決定づけていたのである。そしてこのような認識のし方は実は極めて最近までクローバーにおいて支配的なものであった。(ただし、こうした風潮のさなかにあって、うたごえの根本的な欠陥を指摘したすぐれた論があったことも明記しておかねばならない。かわらばん第 19 号掲載の D 氏の論がそれである。)

クローバーに流れていた二つの考え—音楽を楽しもうという流れと、うたごえ派—の対立が激化し、ついに相容れない存在として分裂せざるを得なくなる時がついに訪れた。前者はクローバーを脱会し、FN 合唱団を結成、クローバーは後者の道を更に政治的な色

彩を濃くしながら進むことになった。昭和 34 年の秋、11 月 7 日の例会で、全音祭、日本のうたごえへの参加について討論が行われたが、その際「全民青」をめぐる議論が沸騰し、その席上、クローバーの有力な指導者であった T 氏、H 氏に反対するグループ 18 名が急遽脱会の意思を表明した。もっともこの分裂は単に考え方の相違によるものというよりも、むしろ対人関係のもつれや感情的な反発に根ざしていたものであることは、当時発行されたかわらばん第 30 号の K 氏、H 氏の記事によって明らかにされているが、とにかく、表面上はサークルの目的意識の相違から生じた分裂であり、このようにして「邪道」な分子を切り捨てたクローバーはほぼ「うたごえ」の路線に忠実に従いながら発展することになったわけである。

「うたごえ」の思考方法については既に O 氏の見解を引用したが、ここに日本のうたごえ運動の中心的存在であり、指導的役割を今日に至るまで担い続けてきた中央合唱団(民青共中央合唱団→民青中央合唱団)が 1951 年に掲げた「行動綱領」を引用しておこう。

- (1) 我々の合唱団は新しいファシズムに対抗し、生活のよここび、団結の美しさ、明るい未来の確信を伝えるためにうたごえをうたう。
- (2) 我々の合唱団は卑俗な流行歌を駆逐し、闘いの中から民族のうたを作り上げる。
- (3) 我々の合唱団は青年戦線の統一のためにうたごえを拡大し、職場、農村、学校などあらゆるところの歌う集団を作る(普及活動)
- (4) 我々の合唱団は民族の独立と自由と平和、民主人民政府の

樹立のためにうたう。

また当時（昭和 35 年）学生のうたごえは過去の政治的偏向の反省の中から、「1、どの程度まで政治性を持つか、2、どのようにして我々のうたうべきうたを決定するか、3、実際に創作するという困難な問題をどう解決するか」（かわらばん第 36 号 昭 35. 4. 23）という大きな問題をかかえて混迷した状態に陥りつつあった。学生のうたごえのみならず、世間一般の文化運動全体が、戦後の急激な発展ののちに厚い壁にぶつかり、すぐれた指導者を欠き、その進むべき方向を見失ったといえよう。

昭和 35 年に起こった安保闘争は、あらゆる労働組合、文化団体、学生等を広範に組織し、一大国民運動を形成した。うたごえの諸団体もデモやストライキの先頭に立って歌唱指導を活発に行った。クローバーも殆どの例会をつぶしてデモに参加し、「うたごえ行動隊」を組織して歌唱指導を行った。安保闘争は日本がはじめて経験した全国民的ひろがりを持った国民運動であったが、それだけに安保の自動成立後の虚脱感は大きく、その後の労働運動、文化運動の流れに大きな影響を及ぼしたといえることができる。

昭和 35 年夏の合宿は画期的な意味を持っている。「7 月 18 日から辰野町で夏の合宿が行われます。…従来は合宿といってもどちらかというと歌の練習は従の方で、景色のよいところ、観光地が選ばれてきた。合宿で練習する曲といってもせいぜい 2、3 曲であった。今年は従来のやり方を変えてみた。まずわたしたちは決して遊

びにゆくのではない。歌の練習を（基礎練習、合唱技術の向上）目的とするものでなくてはならない。従って特別景色のよいところとか、名所旧跡などは最初から考えに入れなかった。私たちがどうしたら気持ちよく、たのしく合宿ができ、まじめにうたに取り組み、クローバーのあれこれを考えることができるかということを考慮に入れました。従って、①従来よりも歌の練習に重点をおくこと（期間の延長—3 日から 1 週間へ）、②なんらかの意味で合宿の成果を問うことができる、の二つを骨子としてはこびました」（かわらばん第 38 号 昭 35. 7. 14 T 氏）。クローバーにとって最初の地方演奏会が辰野町で約 2 千人の聴衆を集めて行われ、また地方合唱団との交流を通じて、クローバーが目標の一つとして掲げていた「普及活動」をかなり実質的な意味を持って行った。

夏休み後、「森のうた」研究会が発足した。この「森のうた」と第一回発表会を結びつけて考えたのはごく一部の人にすぎなかったかもしれないが、とにかく、ここに第一回発表会の礎が築かれたことは大きな意味があろう。同年度（昭 36 年 3 月）の春合宿も、クローバーに作曲をとあげさせる契機となった意味で重要である。「蹄鉄屋」をとあげる過程で、作曲を歌い、聴くということが、現代に生きる人間を社会意識に目覚めさせ、体制の中に生きる人間として、鋭い現状変革の意識とエネルギーを持たしめるための一つの武器と考えるような考え方が強くクローバーを支配するようになったのである。これが 36 年度の活動の中で、夏合宿での舞台構成、第一回発表会での合唱構成へと高揚していったのである。また、いよいよ独自の発表会を持とうということに全員の意識

が統一されたのもこの発表会であった。

昭和 36 年はあらゆる意味でクローバーに変革をもたらした年であると言えよう。第一には第一回発表会が持たれ、徹底的な合宿練習が行われたことであり、その後のクローバーの活動が「音楽中心」に傾斜して行く実質的な基礎が出来たことである。第二には、新島闘争に参加したこと、政暴法反対闘争、更には米ソ両国の核実験再開に反対して、原水爆禁止をテーマとした舞台構成を組むなど、一連の政治的な運動が表面に押し出され、それが発表会後に急速に下向線をたどってゆくことになった点である。第三には、上記の政治的活動の活発化の中でも、20 回近いステージや病院慰問、地方普及活動等、対外的な活動がきわめて活発に行われ、クローバーの持っていた若若しいエネルギーが徹底的に爆発した感じであった。新島闘争とは、東京都下の離島新島に防衛庁のミサイル試射場を建設しようという計画に反対して起こったもので、当時すでにジャーナリズムから殆ど忘れ去られ、民主運動の中心からも外されたものであったが、学生のうたごえが中心となって新たに闘争を組もうとしたものであった。また、創作の素材としてもこの闘争はとりあげられ、砂川闘争を素材とした組曲「砂川」、安保闘争を素材とした組曲「日本の夜明け」について組曲「新島」が作られた。クローバーからはのべ 6 名の人が新島に渡ったが、その成果はあまり明かでなかったと言うべきであろう。その後「新島」がとりあげられることもなかったし、活動のテーマとなることもなかった。

「うたがうまくなろう」という考えは、随分以前から存在してい

たことは確かである。しかしその「うまいうた」をとらえる考え方が、「意識」という音楽外の次元でしかとらえられず、いわば「しっかりと物を考えていれば、自ずから良い合唱ができよう」というように考えられていた。その事に関して、クローバーの音楽的、理論的指導者であった T 氏と、常任指揮者 S 氏との間にかなり大きな相違があった。もっとも S 氏自身によれば、相違点は方法論においてであって、窮極においてはその求めるところは同じだったと言う。「聴衆を感動させる場合二通りある。第一は音楽以外の物で人を感動させてしまう場合で、この場合音楽は二の次である。もし仮に舞台に盲目の子供がずらりとならんで合唱したとする。（又は激しい闘争中の組合員でもよい。）聴衆は合唱が始まる以前に既に半分感動しているから、合唱が少しくらい下手でも一生懸命やっているのを見ると全く感動してしまう。更に合唱が上手であればなおさらである。思想と人間性が音楽と別の所で感動させてしまうのである。これに反して音楽の力だけで感動させる演奏がある。この場合は生の思想は存在できない。高い音楽性と技術、深い思想性は人間性が必要である。例えばどんなに力強く働く者や若者を謳歌した歌でも腹の底から大声で力強く歌えば人を感動させうると考えることは出来ない。音楽的たくましさのみが人を感動させる。又どんなに古くとも知られない難しい歌でも本当に高く深い音楽性に裏打ちされた歌は人を感動させられる。よく発表会等で聴衆の好みを考えてプログラムを作っているのを見かけるが、自信の無い証拠である。今までのクローバーは第一的感動を持って感動とし、交歓会（水曜会）におけるクローバーは中間的なところまで進んできたと思われる。他人の友好的な態度にあずからない、音楽の力だけで非友好的

な人々をも感動させられる合唱をめざして進んでほしい。これが合唱を誰にも受け入れられる普遍的なものとして大きく発展させる原動力であると思う」(かわらばん第45号 昭36.5.20 S氏)

現在のクローバーを考えてみれば、このS氏の見解に負うところがいかに大きいかは容易に理解することができよう。しかしここに至るまでにはまた多くの紆余曲折を経ねばならないのであるが、全体の流れとしては次第に的確な音楽の把握のし方が育ってきている。少なくとも理論の上では音楽と社会というかわりあいに関しては、一応ゆきつくところまでゆきついたのである。残された問題はそれをいかに実現してゆくかであるが、実はこの問題は「音楽の内容」それ自身にかかわってくる問題であった。我々はよりよい音楽を作り、広げてゆかねばならない。しかしその音楽は従来のうたごえが往々にして陥って来た誤りー音楽が生活と結びつくということが、闘争歌やシュプレヒコール的な歌とすりかえられて来たり、あるいは生活そのものの苦しさをある意味でセンチメンタルにとらえておきながら、それを素直な生活感情の表現であると評価したり、あるいは音楽の現代性や民族性を強調するあまり、古典や宗教音楽の中にある高い芸術性、人間性に目を向けまいとするような一の上に立ったものでよいだろうか、という疑問がそれ以来常に提起され続けて来たのである。

国民の全てが高度な政治意識、社会意識を持つことは極めて重要なことである。また自らの生活と権利を守り、平和を望むことも是非考えなければならない問題であるが、戦後のわが国の文化運動は

あまりに性急にそのような要求を満たそうとしたあまり(また性急にならざるをえない程社会の状況は激しく変動し、国民の権利が侵害されていったのであるが)、文化運動を政治活動と直接的に結び付け、文化運動を労働運動の下に従属せしめてきたのではあるまいか。人間の精神を根底から支え、生きることの意味と価値を決定せしめる文化、そしてそれを全国民的なものにしようとする活動が、ともすればその時々々の東証の中にあまりにも多くの根を置きすぎておいたのではないだろうか。それはまた、文化運動の指導者が往々にして労働運動、政治運動の指導者であったわが国の国民運動の人材の乏しさ、底の浅さの表現ではないだろうか。今こそ文化運動は本来の文化そのものの意味を冷静に見つめ、真に我々にとって重要な意味を持つ文化を創造するべきである。西欧諸国と異なり、高度な精神文化が長い封建制度の下で育ちえなかった日本の特殊事情がここにある。

音楽が真に国民すべてのものであることは、デモですべての民衆が闘争歌を歌うことでも、うたごえ喫茶がはやることでも、ましてや低俗コマーシャルソングに染まることでもない。国民の全てが芸術性の高い音楽を味わう能力と余裕を持つこと、そこで初めて「うたが生活の中に入った」と言えるのではないか。コンサートでベートーヴェンを聴き、家に帰って歌謡ベストテンを見る。組合で闘争歌を歌って宴会で蜚声をはりあげ炭坑節をうたう。娘にピアノを習わせて自分は宴会用の小唄をうなる、といった音楽における変則性に気付き、それを正してゆくことが「文化的」な生活ではないのだろうか。我々の生活の中にはビフテキを食いながらオジヤをか

きこむ、といった態の滑稽さが実に多く存在しているような気がする。

話が本旨からはずれたようだ。

36 年夏合宿は三回にわたる地方演奏会と十曲ちかいレパートリーをこなす、という強行スケジュールの下で行われた。この合宿は当初第一回発表会をひかえての基礎練習と森の歌の練習にさく筈であったが、それが変更となり、地方演奏会を通じての普及活動に力点が移った。演奏会のほかに地方青年団体との交流(話し合い、地方民謡の踊りの講習、フォークダンスの集い等)にも多くのエネルギーがさかれた。またこの発表会では既に述べたように「若者のエネルギー」をテーマにした舞台構成ー合唱とナレーション、シュプレヒコール、踊りの組み合わせで、何か合唱で与えられる以上のものを訴えかけようとする試みーが行われた。これは第一回提起発表会での合唱構成への発展を考えるうえで明記しておく必要があろう。

秋から第一回定期発表会の中心曲「森のうた」ーソヴィエトの国土緑化運動をテーマにし、国土建設のよろこびを高らかにうたいあげた大曲ーの練習に入ったが、それと並行して合唱構成の製作が進められた。その頃、突然ソ連が核実験を再開し、それに対抗してアメリカも南太平洋で水爆実験を再開した。唯一原爆の被害を受け、死の灰の恐怖にさらされている日本人として、平和を希求する人類の一人として、これに反対の意思を表明するのは当然ではないか。

合唱団体としての我々はステージの上からそれを訴えかけるのが当然ではないか、という提案が津田氏から出され、それに応じて筆者が中心となって合唱とナレーションからなる合唱構成「我等の手で平和を」が起草された。既にそこで用いる歌が規定されていたので、その線に沿って、原爆の惨禍を訴え(「死んだ女の子」と峠三吉原爆詩集からのナレーション)、広島の実験から我々が反対に立ち上がらなければならないことを説き(「皆の指で字を書こう」とナレーション)、それには団結して闘う姿勢が必要であり(「闘いの中に」とナレーション)、強く闘うためには何よりも自分の生き方を考え、変えてゆくー自己変革ーが必要なのだ(「蹄鉄屋」とナレーション)と結んだ。この試みはクローバーのそれまでの活動を総集したという意味を持っており、我々が「歌うこと」の意味、その役割を考えざるをえなかった。第一回発表会は「森のうた」の練習過程で我々が痛切に感じてきた「技術的な限界」の認識と、政治的主張の必要性が混然一体をなして、その結論を得ないまま次の年に活動に移したのであった。(「うたごえ運動の流れの中にあって民族音楽の創造を私達の活動の目的として自覚し、確信を持ってクローバーを発展させてゆく決心です。その為には、サークルの民主化を更に徹底させ、種々の機構改革を行い、会員数を増やすことなど、為すべきことは沢山あります。…」)第一回発表会プログラムあいさつ(S委員長)こうした視点に立って発表会後大規模な組織替えが目論まれたが、結局創作活動推進の任を含めて探曲部が新設されるなど、小規模な改革に留まった。

発表会がもたらした二つの問題(政治性と技術的欠陥の認識)は、

そのすぐ後に行われた全音祭に出演した早大合唱団の発声法の素晴らしさに驚嘆したことや、世の中一般に浸透しつつあった政治的無関心のムードの中で次第に前者が忘れ去られ、技術的な向上を求める方向へと動いて行った。一方、発表会のステージには70名からの会員が立ったのに、発表会後の会員数は激減し、また適切な活動の目標も立て得ぬままクローバーは低迷の谷間に転落していった。それは37年に入ってから委員長問題のごたごたを通じていっそう危機的な様相をおび、春合宿で一応の（表面的でしかなかったことは否定できないが）会員の相互理解が達成されたかに見えたにもかかわらず、全てが未解決のまま新学期に入った。

それまでのクローバーを理論的にも音楽的にもリードしてきたT氏、O氏等の先輩や、彼等の影響下にありながら実際の運営を担当してきたS氏を失い、クローバーの活動はおおいに混乱をきたした。政治的な傾向に固執しながらも音楽的な向上の必要性を痛切に感じ、その両者の結合点を見出さんとして苦悩した当時の委員長であった筆者は、窮極的には従来のうたごえの視点に支配されて、音楽芸術そのものの姿を見極めることが出来なかったと思う。「水曜会」での早大合唱団の「十の詩」に見た素晴らしい合唱の世界。第一回学内音楽祭のステージでの大失敗などを通じて、ともかくも素晴らしい合唱を作り上げるためには技術的な向上、厳しい練習態度が何よりも必要であることが痛感された。いくら主義主張が正しくとも、我々が実際に行う「合唱」が下手ならば何にもならぬ、という考え方が一挙に表面に踊り出た。そして従来とはうってかわった（？）真剣な練習を重ね、関音祭でのステージでは、他の合唱団が

相変わらず立派な主張を掲げながらまずい合唱に満足している姿を目の当たりに見て、すでに我々の活動が学生のうたごえの枠をはみ出していることを認識した。その後も、労音主催の「日本のうた」創作曲発表会に選抜出演する機会を持ち、そのための練習が続けられる過程から、どうやら合唱団体としての現在のクローバーの基礎が培われてきたようであった。

その夏合宿では、以上のような考えから、クローバーがそれまで広範囲に手を伸ばしてその活動をあいまいにしてきた要素、いわゆる人間関係と呼ばれた話し合いを通じての相互理解や、それ自体意味があることとして承認されてきた部活動、学習会、子供会、うたう会、等々の諸要素を極力切り捨て、それらは何れも「良い合唱を作るための一つの手段である」という見解が打ち出された。いわゆる「我々の全ての活動は音楽を軸として展開する」というテーゼがそれである。（しかし、「その他全ての活動」の重要性に固執している点にはまだクローバーを総合サークルとして考えようとする旧来の考え方が大きく露呈されてはいるが）。またクローバーが終始重要視し続けてきた「人間関係」－全ての会員が相互理解の上に立って暖かい友情の絆でむすばれるべきである、という考え方が往々にして甘やかしいであり、なれあいであることにも気付いた。

第二回発表会は、「森のうた」と同じシヨスタコーヴィッチの「十の詩」を中心とするレパで構成されたが、それまでとりあげてを躊躇してきた古典が「より多くの音楽に接するために」とりあげられ、手始めにモーツアルトの「Ave Velum Corpus」がレパに入

った。童謡、民謡、古典、創作曲、黒人霊歌、ロシア民謡、十の詩、
 というとりあわせは「総花的」という批判もあびたが、とにかくク
 ローバーは見違えるほどうまくなった、という評価を得ることがで
 きた。この年の中心的な課題「より多くの音楽に接し、良い合唱を
 作る」というテーマは、その後更に音楽性の探求への活動を深め、
 読者諸氏のご承知のと通りのクローバーへと進んできている。

これまで書いてきたクローバーの歴史はいわばクローバー主流の
 歴史である。これらの声に隠された声なき声が存在していたことは
 言うまでもない。それはクローバー創立以来伝統的に流れている
 「楽しいクローバー」にこよなく愛着をおぼえている分子であるが、
 それは全ての会員の時代を超えた欲求であることは十分に承認し
 てかからなければならない。また、今はその力を失ったかに見える
 「社会派」も、それがサークル以前の、人間として当然考えなけれ
 ばならない問題を内包しており、大学生のサークルのあり方として
 常に再燃しうる可能性を持っている。クローバーの中には単純な楽
 しさ、社会意識、芸術性がそれぞれの時代によって比重のちがいこ
 そあれ一貫してからみあいながら形成する微妙な魅力がある。その
 どれもが我々の生活にとって必要なものであり、また混乱させるの
 だ。そして、その必要欠くべからざるものが、我々の活動のある時
 には高揚させ、ある時には低迷させる要因であるというところにこ
 そ、案外真実があるのではないだろうか。

1964. 3. 1 文責 S

